

## 「青森プロボノチャレンジ」シンポジウム トークセッション概要

日時：令和2年1月31日（金）13:30～15:30

場所：ラ・プラス青い森 2F カメリア（青森市中央1-11-8）

○テーマ 「青森県の社会課題を解決するために NPO と企業人との新しい関係を築こう」

### 【コーディネーター】

認定 NPO 法人サービスグラント 代表理事 嗟峨生馬 氏

### 【パネリスト】

株式会社リクルートマネジメントソリューションズ組織行動研究所 研究員 藤澤理恵氏

特定非営利活動法人コミュニサーあおもり 理事長 西川智香子 氏

特定非営利活動法人あおもりラジオくらぶ 理事 小笠原秀樹 氏



### 【コーディネーター】

お手元の資料で、「青森県基本計画」があると思いますが、青森県の人口の推移が書かれています。こちらにありますとおり、大きな流れとして減少傾向にあります。これは県民の皆様が共有している情報だと思います。また、2025年問題、超高齢化時代という課題があり、それに向けて、今後重視していく取組として、「青森県型地域共生社会」の実現が挙げられています。さまざまなアジェンダが記載されていますが、ここに「多様な主体・人財の参加・協働」とあります。これがまさに、地域を担う NPO・人、場合によっては地域外の人、関係人口というような言葉もありますが、幅広い人が地域に関わっていくことが求められています。青森県の方は一人何役も担っている方もいらっしゃると思いますが、それでも、地域活動を担っているのはいつも同じような人たちだということがあると思います。もっと、今までそういったことに出てこれなかったような人たちが、前に出て来るようなことが求められているのではないかと思います。

そういった中で、プロボノは、共生社会を実現していく中で1つの可能性を模索していくものなのではないかと思います。

今日は、コミュニサーあおもりというプロボノで支援を受けた団体と、団体を支援したプロボノワーカールのおふたりがセットで出ていらっしゃると思いますので、実際どうだったかということをお話したいと思います。

では、早速なんですけれども、まず西川さんにお話を伺いたいと思うのですが、西川さんからプロボノ参加に至った経緯ですとか主な活動内容についてお話を聞きたいと思っています。

## 【西川氏】

NPO 法人コミュニサーあおもり代表の西川です。

去年もお陰様で参加させていただいて、プロボノに支援していただき、本当に助かりました。まず、そのお礼から入りたいと思います。

活動としましては、いろいろなボランティアといいますが、仲間がいて成り立っているんですけども、皆仕事を持ちながらなので、なかなか普段の関わりができないことが多いというのが実情で、やはり人手不足というのが大変大きい課題です。

その中で、主な事業として婚活があります。(スライドを指して) こちらは平内町から委託を受けて4年になりますが、出会いの場を作っています。今年度はあと2つ、全部で3つの自治体から結婚支援の委託を受けて行っています。

去年はこの事業でプロボノの支援を受けて、事業を進めていく上でのマニュアルを作ってくださいました。今年更に人手不足が深刻になっていたのも、これは大活躍でした。

私がほぼ一人でやっているような状況だったのですが、人の手を介しての事業が一時あったので、私が作ったものなんだけれどもやり方が変わったものがたくさんあったので、それがどのように変わってきたのか再認識できる資料となっていて、私自身がすごく活用していましたので、とてもありがたかったなというふうに思っています。非常に良くまとまっていた資料でした。

そして、もう1つの事業、2017年、フリースクール事業を立ち上げたのですが、助成金を使って立ち上げたものだったので、今年はその助成金がなくなりまして、こちらも深刻な人手不足と資金不足で、たくさんの人に支えられての1年でした。本当にこの事業は思っている以上に大変で、私たちも覚悟して始めたはずなのですが、私たちもいつやめたらいいのかと考えながら、「じゃあどうして進めたらいいか」と考えながら進めて参りました。

7月には新町のワンフロアから、様々な子どもたちを受け入れるために、港町の8LDKの一軒家に引っ越しをしまして、そちらもまたお金と人手がかかりました。人手は10人くらいボランティアの方が集まって、皆さんのおかげで引っ越しができました。ワンフロアからの移動でしたので、足りないものがものすごくたくさんあって、フェイスブックなどで「扇風機ありませんか」とか「机がもっと必要なのでありませんか」などと呼びかけて、本当にここにも御協力いただいた方が何人もいらっしゃるんですけども、たくさん助けていただき、少しずつ準備をしています。





こちらは去年のワンフロアの頃のものですが、子どもたち、みんないきいきしています。不登校の子どもたちと、学生ボランティアです。みんなで楽しく遊んだり、下の写真は年越しそばを子どもたちが作って、私たちが食べさせてもらったようすです。

今現在は、港町で、不登校や学校に行きづらい子どもたちが、きちんと勉強もできて遊べるように、さまざまなものを用意しました。タブレットで、e-ラーニングで教科書準拠した内容を勉強できるようにするなど、環境をこの1年で一気に整えました。

また、先日不登校の方や親御さんを対象に座談会を実施しました。

このように、さまざまな形で御支援いただいているところですが、やはり人手不足であり、資金がないことから社員という常駐できる人材を雇用できない現実があります。

婚活にしろフリースクールにしろ、課題は山積みである中で、去年と今年と、どれかひとつでも解決の糸口になればという思いがあって、プロボノに参加しました。実は、去年終わった段階で、来年度もお願いしたいという話を嵯峨さんにも県にもお話ししていました。それを善処していただいて、本当に感謝で一杯です。

今回の内容としましては、お手元に今年度実際にプロボノの方に作っていただいた資料をお配りしていますが、まだきちんと印刷したものではないので恐縮ですが、総合的なもの、親御さん向けのもの、それと、寄附者用のものですが、実はここ最近、実際にこれを持って寄附や協賛を集めるため歩いてくださるような方がようやく出てきましたので、プロボノの方に作っていただいたものに、持ち歩く方の要望をプラスした内容で私が少しだけ修正して作ったものです。このように、編集できるように納品していただいたので、そのように変えて使うことを希望される方には（御自身で）変えて使うこともできます。それと、もう1つ、寄附申込書を添付させていただいていますが、これを併せて実際に持って行っていただいて、寄附を呼びかけているところです。ということで、大変ありがたく、思っています。

#### 【コーディネーター】

はい、ありがとうございます。2年間の助成金が切れて、自主事業でやっていかなければならなくなって、それこそやめてしまおうかなと思っていたということですが、それでも西川さんがこの活動を続けておられるというのは、たとえば青森において、フリースクールというもの自体がそんなに数がなかったりするのでしょうか？現状から、やらなければならないというものだったのでしょうか？

#### 【西川氏】

そうですね。私たちが助成金いただいて立ち上げたときは、県内で唯一、初めてのフリースクールということで、まあ小さい意味ではそういう利用をしていた方々はたくさんいましたけれども、フリースクールと謳ってやっているところはなかったので、うちが現実的には初めてですね。それを公言してから、少しずつ「立ち上げました」とか、「うちもやってみたいと思っていた」という動きも県内で出てきているのも現実なのですが、ただ、同じ頃に立ち上げた方で、資金面ですごく困難を感じて、もう既に止められている方もいらっしゃるくらい、大変な事業です。

【コーディネーター】

しかし、西川さんが立ち上げたからこそ、次の人たちが出てきたということですね。それでも、続けるのは非常に難しいということですね。そんな中で、8LDKの一軒家を借りるというのは思い切られたということですね。

【西川氏】

思い切りましたねえ（笑）やはり、去年来ていただいていた子達の中で、不登校になるのは一人一人みんな違う事情があるんですが、中にはたくさん人がいるとダメという子、発達障害があるからとか、そういう子達も実際に、そういう子達を私達は実際去年2人ほど漏らしてしまっていたのですが、後悔しなくて。でも、当時私達はどうすることもできなかったんです。

それがあったので、どうしても、続けていくなら部屋数というか、区切れる空間・環境を整えてあげたいなあと、急いだところもあったんですが、どうせならということでなんとかやりましたね。

【コーディネーター】

まさに、退路を断ってそういうことをされたように聞こえますけれども、そういう中で、プロボノの皆様には情報発信とかあるいは資金調達ということで御協力を、というのが強いニーズだったということですね。

【西川氏】

そうですね。最初のヒアリングの段階では、またちょっと違う話も出ていたんですが、最終的にはここに着地して、「あれあれ？」という話も先ほどまでの話にあったようにうちでもあったんですが、最終的には役に立つようなものができましたので、本当に「結果良ければすべてよし」という感じですね。

【コーディネーター】

なるほど。わかりました。

では、いったん小笠原さんに自己紹介も含めて、よろしくお願いします。

【小笠原氏】

はい、この度はこういう機会を与えていただき、ありがとうございます。

私、インターネットラジオをやっておりまして、いろいろな団体・個人の方からお話を伺っているのですが、番組の中には、あおもり NPO サポートセンターが県内で様々な活動をしておられる NPO 法人を紹介しようという発信を行っております。まさに、お隣におられるコミュニサーあおもりの西川さんにも、ネットのラジオで何回も PR していただいたような御縁があり、更には、今年度は（コミュニサーあおもりに）プロボノワーカーとして支援をするというタイミングでした。



その中で感じられることをお話して行ければと思っています。

あおもりラジオくらぶの中身については、本日リーフレットを配布しておりますので、それをご覧くださいと思います。私自身の履歴にふれますと、青森市生まれ、52歳です。青森朝日放送に入社して、放送記者として5年、原子力や三内丸山遺跡など、大変な時期に担当しました。また、選挙も北村知事から木村知事に代わるタイミングで、県政も担当しました。（いま活動している）あおもりラジオくらぶは私自身がラジオが好きだから活動をしているということもあるんですが、青森県内で活動している人達をもっともっと紹介したり応援したりできないのかということを考えてみました。（テレビの記者時代も）足下を見つめると、頑張っている人達はたくさんいて、そういう人達を支援できないかなと当時から思っていました。

そういう中で私が青森公立大学にいたときに、NPO 関係ではご存知の方も多いと思うので

すが、三上亨さんとの出会いがありました。彼はグリーンエネルギー青森という NPO 法人の設立に関わって、市民風車を建てた実績があり、更には、私と NPO 支援機関だった NPO 青森推進会議という組織で地域の支援を一緒にやっていました。私にとっては師匠のような方であり、実は病気で亡くなられたんですが、いろいろと教えていただきました。私はその支援機関の事務局長をしていたんですが、プロボノにチャレンジしようという経緯は、そこにあります。

私はこの他に本職としては政策集団地域再生青森会議という、これも三上と共に 2015 年に立ち上げた組織ですが、地域づくりの担い手支援の組織で活動しています。先ほど紹介があった地域共生社会のリーフレット（青森県基本計画）に、交通ネットワークの形成や買い物支援の推進という内容がありますが、まさに県民生協とコラボして買い物困難者に対しての助けになるよう移動販売車を出した仕掛けもしています。また、地域共生社会ということで、県民局からお話をいただいて、実際に十和田の東地区というところで担い手支援をお手伝いしたり、地域共生社会に関しての取組を様々やっております。

あおもりラジオくらぶも地域再生青森会議も同じなのですが、人の成長を応援することに私が喜びを覚えるといいますか、自分の使命のようなものと思っています。

今回プロボノに関わった経緯になりますが、最初は支援する側に関わりたいと思っていました。サービスグラントの仕組みはこの事業で初めて知りまして、これまでの自身の活動に似ているなと思いました。NPO 支援機関当時に、「マネジメント専門家委員会」というものを立ち上げておりました。職業訓練校からのお仕事として、NPO を使って創業しようということで、3 ヶ月くらいのカリキュラムで、専門の講師およそ 30 人くらいいたんですが、経営のノウハウを教えるというものでした。そのつながりを続けていこうということと、せっかく NPO というものが社会に貢献するという役割があるということが皆さんにも通じてきたところだったので、NPO の経営支援をしていこうということで立ち上げたのです。ですので、専門家としては士業の方や広告代理店の方など、いろんなスキル、専門知識をお持ちの方が関わっていました。

今も再生会議の中でいろいろな相談を受けます。こうした組織の課題を解決しようというプロボノの仕組みを知りたいと思って、参加しました。ただ1年目は、あおもりラジオくらぶで支援を受ける側での参加を打診されましたので、最初はそれで参加しました。内容は、ホームページのリニューアルを視野に入れて、事業内容や広報戦略の再検討を受けました。実はまだ、ウェブサイトのリニューアルまで至っていませんが、（あおもりラジオくらぶ）代表の元青森放送の大竹辰也さんも私も（放送）現場を知っているということもあり、そういう専門的なノウハウを使って、地域の皆さんにいろいろ企画してみてもどうかというような提案がありました。いまですが、地域の皆さんの PR の場にしていこうということで、本職をやっている事務所と、ラジオくらぶの事務所を一緒にしまして、インタビュールームを常設しております。

そして2年目は、プロボノワーカーとしてコミュニサーあおもりを支援するということになりました。西川さんとはその前から知り合いではあったんですが、支援をして本当に知らないことが多いと改めて思いました。私はチームリーダーを務めさせていただいたんですが、最初はお願ひされたのは「フリースクールの説明資料」ということだったので、パワーポイントの説明資料数枚というイメージで進めていたのですが、話し合いを進めていくうちに、せっかくやるのであれば、いろいろな対象に向けた資料を個別に作ってはということになりました。実際に聞き取りをすると、「こういう風にした方がいいんじゃないか」と変わってきたりするんです。そうすると、当初よりもボリュームあるなということになり、そのあたりの調整が難しかったというのが実感としてあります。

#### 【コーディネーター】

ありがとうございました。小笠原さんは、ある意味、プロボノワーカーでもあり、NPO の

人でもあるわけですが、その中で是非お伺いしたいのは、2年目で知っているようで知らないことがあったと。NPOに関わられて、かなり長い経験をお持ちだと思うのですが、そんな小笠原さんを持ってしても、知っているようで知らないことが多いというのは、どういうことなんでしょうか。

【小笠原氏】

そうですね。先ほどのマネジメント専門家委員会とのプロボノとの大きな違いというのは何なのかなんですけれども、経営の課題というのは、はじめは私の方で整理はするんですけども、1対1でつなぐんですね。例えば、労務の相談などは社労士さんに直接つなぐということになるんですけども、解決すべき課題にフォーカスして、何が不足しているかという支援があるんです。

(プロボノは)今回は、実際にチームで私の他に二人いて合わせて3人で支援したんですが、もともとの根幹というか根っここの部分で、なぜこのフリースクールを立ち上げたのか、なぜ続けているのかという部分で、時間をかけて、西川さんだけでなくステークホルダーの方達、今回3名の方にヒアリングをしたんです。多面的に見て、西川さんの底辺にあるところ、それが何なのかをどう引き出すのかというところが苦労した点でもあります。また、そこが自分自身、刺激を受けたところでもあります。

【コーディネーター】

なるほど。かなり詳しい方でも、入ってみるとまた、いろいろあるということですね。

【小笠原氏】

そうですね。時間をかなりかけましたからね。

【コーディネーター】

わかりました、ありがとうございました。

では、西川さんにお聞きします。2回のプロボノを受けられた後なので、だいぶプロボノってこういう感じ、というのがわかってきているところだと思うんですけども、本日御来場の方々の中にはNPOの方々もいらっしゃって、まだプロボノを経験されていない団体野方もいらっしゃいます。ちょっと2年前にタイムトリップしていただいて、西川さんがプロボノのサポートを受ける前の段階で、何か不安とか、大丈夫かなというお気持ちがあったかお伺いしたいのですが。

【西川氏】

私、プロボノということについて、もともと少しだけ知識はあって、何となくですが、青森県からこの案内をいただいたときに、「うちにもいっぱいいるじゃないか」と思って参加しました。やることは当然いろいろ違いますけれども、あまり不安というものはなくて、むしろ人手がない方が不安だらけだったので、1つの課題だけでも関わってくれる方が来るということの方が、期待感がとても大きかったです。そこからのスタートでした。

【コーディネーター】

婚活事業にしても、フリースクール事業にしても、よく知らない方が見えられるということになるので、そういう方を受け入れるのが手間かなとも思うのですが。あるいは、団体内をかき混ぜられるのではないかとか、そういう不安があってもおかしくないかなとも思うのですが。

【西川氏】

そういうことは私はなかったんですが、すごく知ってもらうために、確かに時間と手間はかかります。一番始めに、まずプロボノ自体がどのように進むのかわからないので、流れを提示してもらっていても想像がつかなかったんで、サービスグラントの方からヒアリングといわれた時も、婚活事業でびっちり時間をとられる時期だったので、他の事業をやりなが

ら、運営もしながら、わかってもらう時間を割くのが大変でした。この時間を工面するのが本当に大変でしたが、なんとかつきあってくださって、「いつがいいですか」と連絡もすごくくださって、何とかヒアリングを終えた段階で「そうか、こうやって進んでいくんだ」というのがようやくわかって、一安心したという感じでした。

【コーディネーター】

最初の時点では時間もかかるというのは言えるということですが、とはいえ、トータルとして、お忙しい中で、後になって西川さんの使う時間の省略化になったということはありませんか？ そうなれば、最終的にはかけた時間の甲斐があったなということになると思うのですが、そのへんを天秤にかけるとどうなんでしょうか。

【西川氏】

いや、それはもう全然、比にならないです。この資料を私が作るとすると、すごく労力、時間がかかるし、うまく作る自信もないし。それを、前回も今回もきちんと作っていただいて、実際に活用もできていますので、後からですが、あの時間を無理して作って、つきあっていただいて、自分も時間を割いて作って、今思えば短い時間だったなと思います。

【コーディネーター】

ありがとうございます。

では、今度は小笠原さんなんですけれども、小笠原さんは今年度プロボノワーカーとして御登録いただいたんですが、登録ということについて、気づきや御自身のスキルについて何かお感じになったことはありますか。

【小笠原氏】

入力シートというのがあったんですが、何を書いたらいいか真っ白になってしまって。というのも、自分の強みというのは何なんだろうと改めて考えてしまったんです。ないわけではなくて、誰でもあると思うんです。じゃあ私は何ができるんだろうということ、「支援」ということでくくってしまうんですが、経験としてラジオでインタビューをしていたので、話をどう引き出すかとか、インタビューする力であったり、そういうのは割合いいんじゃないかと他者から言われたりしたので、そういうことなのかなと思ったり。

今回は、コミュニサーあおもりのプロボノプロジェクトの中では、実際にパソコンを開いて作業をするというのは、私自身はあまりなくて、ワーカーの人達に助けられたところがありました。私は、調整したり、俯瞰してみたりということがあって、何度もメールで「いつがいいですか」というような連絡をしていたのは実は私ですけど、自分自身としては、うまく成果を出すために、どういうハンドルをしたらいいのかなというようなことを考えていました。そういうことを改めて考える機会になったのかなと思います。

やはり、プロボノワーカーとしてどう関わるのかということを見ると、より多くの人に参加してほしい。つまり、より多くの人を経験することによって、(団体にとっては) 団体の成長に役立つからこの仕組みはいいですよということになるんですが、(プロボノワーカーにとっては) 自分はどういう風に役立てるのかということが最初は見つからないんじゃないかと思います。できない理由をみると、「時間がないから」「大変だから」などと皆さん見つけてしまうと思うんですが、一方で「貢献したいから」「役に立ちたいから」という動機もあると思うんです。何で役に立てるのかというところを、うまく引き出してあげるような工夫があってもいいのかなと思います。

【コーディネーター】

スキルと言われて頭が真っ白になったとおっしゃいましたが、確かに、たとえばデザイナーをやっていますとか、いわゆる専門職というような仕事であればスキルと言いやすいんでしょうけれども。しかし、調整というのも大事な仕事ですよ。

【小笠原氏】

そうですね。ですから、先ほど話にも出ていましたけれども、まずメンバーの中で、それぞれの得意なものを聞き出したというのは、ひとつの方法だと思います。やはり専門的なことという、士業であれば資格がありますから、それが専門だと言えるんですけども。

たとえば、会社の中で経理をしていますという方がいたとして、団体の中には経理や会計とかそうした仕組みづくりというのが苦手だったりするところも多いので、そういうことに詳しい人間がよかったですし、ちょっとインターネットに詳しいというのがウェブの発信であったりアドバイスできたりなどがあります。生活や仕事の中で、得意なことがちょっとでもあれば、役に立てるチャンスがあるんだと思います。それを見つけてあげるということが大切なんじゃないかと思います。

【コーディネーター】

なるほど、ありがとうございます。

ちょっとしたこと、とおっしゃいましたが、西川さんからみた小笠原さんは、どんな風に見えましたか？

【西川氏】

もともと存じ上げていたということもあったので、すごくやり取りはしやすかったというのが大きいですが、それにしても、こっち側の予定とプロボノの方々の予定となかなか合わなくて、それをうまく調整しながらきちんとこまめに連絡してくださって、本当に頼りがいのあるリーダーさんでした。

【コーディネーター】

恐らく、内部では皆さんのことをうまく引き出しながら進めていくよう動かれたと思います。そういう方がいらっしゃらないと、プロジェクトがうまく進まないと思うのですが、実際進めていく上では、小笠原さんは御苦労も多々あったと思います。プロボノをやられる中で、最も苦労したのはやはり日程の調整ですか？他にもありましたでしょうか。

【小笠原氏】

先ほど触れましたが、最初は、パワーポイントで説明資料、営業資料を作らしようということだったんですが、チラシを作らしようということになって、それで「こうやって作ったリーフレットがあるんだけど」みたいなものが出てきて、そういうものがあるなら、もっと生かせばいいじゃないかということになって。

私、ボランティアの話をするときに、貢献という話をするんですが、自分自身は「こういう貢献をしたい」と思っているけど、相手の方からいろんな話を聞いたり、より深く関わっていくと相手に引っ張られるということがあって、そういったときにそのバランスを私がどうするかということになるんです。今回のコミュニサーあおもりの支援でも私だけでなく他のチームメンバーも、「もっともっと役に立ちたい」「こうした方がもっと喜んでもらえるんじゃないか」という思いが勝っていくんですね。そこはうまく受け入れていただいていたんですが、ただその作業が出て来ることによって無理をすることになるわけです。それを、うまくチームのメンバーも理解して、作業が生じることの覚悟もありましたが、チラシを作ることが得意だという人もいましたし、それをサポートする人もいてということでもうまくやれました。メンバーに恵まれましたね。

【コーディネーター】

ありがとうございます。ここまで振り返りつつ、藤澤さんにも是非伺いたいんですが、プロボノワーカーの方にいろいろ直接お話を聴かれていますと思いますが、非常に時間的に制約があるわけで、その中でチームを組んで活動していくというプロボノの難しさ、また、それが逆に本業との違いやそれと比べた良さなどがあるのかどうか、制約があるからこそそのプロ



ボノの気づきなどがあるのかどうかお聞きしたいんですが。

【藤澤氏】

すごくあります。制約があるからこそ、本業をやりながら、時間をやりくりして、チームの中でやっていると、お互いカバーしてあげようとか、助けあおうとか、あるいは自分のあまり得意じゃない部分はいつそ手放して任せようとか。先ほど、成果を挙げるために何をしたらいいんだろうと非常に考えたというお話がありましたけれども、みんなでそれを考えて工夫していくというのは、制約があるからこそ、手放すところもあって、人を頼りながらも自分も生かされる、そういう関わり方は本当に素晴らしいなと思います。仕事とちよつと違うところだと思います。



【コーディネーター】

そういう制約がある中で何かを成し遂げるということをしてますと、こういう状況でも何かできるんだなという自信みたいなものも。

【藤澤氏】

そうですね。仕事というのは、専門性を磨いていく側面が強くて、これをやればうまく行く、これが自分のスキルであり貢献の仕方だといったことがはっきりしていることが多いと思うんですね。一方、プロボノでは自分の専門性がそのままの形では使えないために、社会にインパクトを出すことだったり、目の前のNPOを助けるために、何でもあるものは使っていこうという気持ちになる。たとえてして良くないかもしれませんが、冷蔵庫の余り物でおいしい食事を作るというような、そういう工夫の仕方が実は思わぬ新しい働き方を見つけるとか、自分の強みの名前が変わるとか、非常におもしろいし、発展性があるのかなと思います。

【コーディネーター】

ありがとうございます。地域共生社会というのは、いろんな組織のいろんな立場の人達が、一緒に何かをやるということがますます求められていくということですよ。

ですから、組織の中でやってきたやりかただけではなくて、他の人達とやっていくことになるので、他の人達とやっていくということは、自分の職場から離れたり、自分の居場所と違うところで、常にアウェイゲームを戦うような感じですよ。

【藤澤氏】

いろんな意味で飛び込むってことがあるんじゃないかなと思います。人の心に飛び込むっていうこともそうだと思いますし、スキルがなかったら参加できないんだということが仕事では多い訳ですけども、そうじゃなくて役に立ちたいという気持ちで一緒にいることで何かが見つけられるというような。そういう意味での、「寄り添う」ということが価値だと思うし、仕事でも、そういう約束されない成果を求めていくような仕事は今後増えていくと思いますので、「飛び込む力」というのは本当に求められていくんじゃないかなと思います。

【コーディネーター】

「飛び込む力」、いい言葉をいただきました。ありがとうございます。

一方で、課題について考えていくことも必要かなと思います。2年間やってきまして、前半の私の報告でも少し挙げさせていただいたところなのですが、是非西川さん、小笠原さんの方から、特に西川さんからは受けられる側の立場として、NPO側として心がけるべきことについて、コメントがあればお伺いしたいのですが。

その後、小笠原さんには続きまして、プロボノ側として心がけるべきこととか、こういったことが必要なんではないかというような御提言がありましたら、いただきたいと思います。

#### 【西川氏】

私たちの活動とか、それに対する地域課題について、意外と知らない方が来てくださるわけで、逆にそれは悪いことではなくて、私たちも知ってもらえるチャンスになるので、まずは心がけるべきというか、知ってもらおう・わかしてもらおうというようなことを強く思いながら訴えていく、まずは社会の人達に訴えていかなければいけないことなので、それを整理する意味にもなると思うんですね。ですので、来ている数人の方にまずはわかしてもらおうと思いながら、やっていくという心づもりが必要ではないかと思います。

それで、その上で、お互いに納得がいくように、お互い最初からこまめに連絡を取ることと、ボランティアさんだからと逆に遠慮をしすぎると、最終的な着地がちゃんとしたものができなくて、こっちも納得いかないし、作った側も「頑張ったのに！」と不満が残ることになってしまうので、逆にちゃんと遠慮せずにお伝えするというところで、落としどころを一緒に考える、一緒に歩いていくということについて、気をつけながらやっていけたら、うまくいくんじゃないかなと思います。

#### 【コーディネーター】

知ってもらおうという気持ちで臨む、遠慮しない、ということですね。確かに、そこに来る人は数人、3～5人程度かもしれませんが、その人たちが理解をして、成果物ができて、先ほどご報告されましたように、実際にそれを企業にお持ちになって営業してくれる人が出てきてくれたということですよ。そうすると、今度はその企業の方、従業員の方に伝わって、だんだんと広がっていくということがあるわけで、そういうことも含めて良さなのではないかということですね。

では、小笠原さんはどうでしょうか？

#### 【小笠原氏】

ワーカーをどう増やしていくのか、どういうふうに関わりを持っていくのかということですが、「地域共生社会」というのは、まさにいろいろな主体が一緒になって、これからの地域、特に少子高齢化という現状の中でどう対応していくかというようなことがあるわけです。そういった中で、多くの企業は、「じゃあ社員を出しましょう」というふうにはいかなかったり、御本人がやりたいと思っても言い出せなかったりといったようなことがあると思うんですね。強制というよりは、やはり自主性があった方がいいし、そういった方たちがどんどん外に出て貢献できるチャンスを促していった方がいいわけで、そう考えると、社員が出ていきやすい環境をどう作っていくのか、それに対して経営者側も、どんどんその組織の人たちが外とつながっていくことがこれからの地域を作っていくために必要なことなんだというように考えていくこと。どうしても、例えば営業の人は限られたところでしか接点がないという中で、実は地域の中にはいろいろな課題がある。もしかしたらそこにビジネスのヒントがあるのかもしれない。それでもいいんです。とにかく、社会に出ていくような環境を整えていくことが必要。地域共生社会の実現のためには、いろいろな主体がフラットに関われる環境、人材が行き会うような中でプロボノを仕組みづけていくということが必要だと思うし、それをバックアップするリーダー、経営者が必要だと思います。

【コーディネーター】

ありがとうございます。やはり、社員を出すというよりは、今言われましたように、「貢献できるチャンスなんだ」と、そしてそれをむしろ、「これから必要なものなんだからやっていこう」というスタンスが必要なのではないかということですね。

藤澤さんから、これからの課題、今後どうしていったらよいか、といったようなところについてお話しいただければと思います。

【藤澤氏】

まさに、お二人のおっしゃっていたことのおりだなと思いつながりながらお話を聞いていたんですが、潜在的に飛び込みたい・挑戦したい方に届いて、その方が参加できるようになるのが一番だなと思います。

人材育成に関わっている立場から申しますと、本当に、企業で今求められている能力を育てる機会としてこんなに最良のものはないなと思っています。社員が自発的に出て行って、学んで強くなって帰ってくるわけですから、こんないいことはないなと思っています。

今日お話ししていく中で、「ああ、そうなんだな。」とわかったことがあって、プロフェッショナルリズムの時代になってきているというか、失敗できないし、早く答えを出さなければいけないというので、そうするとプロに頼らざるを得ない、プロにならざるを得ない状況になっています。言われたことはすぐ答えられないといけない、そういう時代になってきているんですけど、プロボノの世界や地域共生社会の中では、むしろプロフェッショナルリズムとは反対の、アマチュアリズム、そっち側がすごく大事なことなんだなと思いました。それを学ぶ機会でもあり、発揮する機会でもある。アマチュアであることでむしろ学びがあり、成果を出せるということです。そうすると、楽しんで関心を持って関わっていくからこそ、あとから力がついてきたり、成果を出せるのではないかと。先ほど「飛び込む」というワードを捨てていただきましたけれども、そういうものが出せるのはむしろアマチュアリズムなのではないでしょうか。

関心を持って、人に寄り添っていく、そこに関係性がついてきて新しい展開が、先に計画はできなくて、どんどんいい方に転がって行って。大変なことも増えてくるけれども、支えてくれる人も増えていくというのが、青森型の共生社会なのかなとすごく今日思えてきました。2年間携わって、ようやくそういうことなのかな、と感じています。

【コーディネーター】

ありがとうございます。会社の外に出て強くなって帰ってきてくれる、その「帰ってきてくれる」というところが大事なんですね。

【藤澤氏】

そうなんだと思います。やっぱり、越境学習ということが流行っていると先ほど申し上げたんですが、外に出すと辞めてしまうんじゃないかということや、すごく恐れる会社はまだまだたくさんあって。でももう、なんとか力をつけていかないといけないから、思い切って開くという会社が出てきたという段階なんですね。

私が今まで調査してきたのは、基本的に、外で何か経験してきたらまずは自分のホームで生かしたいという方がすごく多いということです。思い切ってチャレンジするんだけど、何か生かしきれなくて仕方なくて辞めることを選ぶとか、パラレルキャリアで外では新しく得たスキル・経験を使うけれども中では使わないとか、そういうことも確かにあります。けれども、実は多様な人が多様な面を持っているということを会社の中でも出せるようになるとか、時間的にもやりくりして午前中は外で活動して午後は仕事をするとか、そういうふうに、どんどん垣根も下がっていくと、自分の慣れ親しんだホームが一番力を発揮しやすいので、そういう環境さえあれば戻ってくるのは自然な流れだと思うし、いろんな人と

話していても、実際そういう環境にいる方は戻ってきています。自分の組織の中に新しいものを立ち上げたり、仕事の仕方を変えたりするなどしていることで、垣根をどんどん下げていくことで、むしろ両方とも良くなるという。戻ってくることを経営者が信じることで、信じて外に出すことが大事なのだと思います。

【コーディネーター】

ぜひ、経営者の方にお伝えしたいことだと思います。今年度参加された方からの声でも、そういう声が聞こえてきてるんですね。

【藤澤氏】

そうなんです。外でいろいろ経験して面白かったんだけど、自分が本当に情熱を傾けてやりたいことは、仕事の方がそれを受け止めてくれる人が多い。だからといって、仕事を粛々とやるのではなく、仕事の意味を語り合いながら仕事をしたい、それを語り合える上司や同僚がいてほしい。」という願いをおっしゃっている方がいました。彼女はもしかしたら、すごく偉くなるかもしれないなと思うし、もしかしたらすぐに辞めちゃうかもしれないなとも思いました。それがどっちは会社の上司や同僚次第で、本当に熱心にこの事業をやりたいんだということを語り合える同僚がどのくらいいるのかということかと思えます。

【コーディネーター】

なるほど、ありがとうございました。

それでは、そろそろまとめということで、課題として、NPO からとしては「課題を知ってもらうということ」、企業としては「働く人がプロボノを始める際のハードルを取り除くということ」があると。もちろん、プロボノ個人としても、「とにかく飛び込んでみるということ」が必要です。それぞれ課題があるんですが、大きな流れとしては、今日の大きなテーマである「青森県型地域共生社会の実現」というものがある中で、人口減少などに目を向けますとどうしても暗い雰囲気になってしまいますが、まだまだ地域の中に関わり切れていない人たちがいるので、もっと巻き込んでいった方がいいということです。1人何役もとか、あるいは地域外の人も引き込むとかいうことも含めて、いろんな可能性があるのではないかなと思っております。

まず、試験的にこの2年間青森プロボノチャレンジを実施してきましたけれども、その中で得られた気づきを、「青森県型地域共生社会」実現のヒント、一助になっていくんじゃないかなと期待しております。

まだまだ改良のあるプログラムであると私自身も反省と自戒がありますが、一方で、可能性もあるプログラムだなと感じておりますので、是非またこの取組に関心を持ってくださるとありがたいなと思います。周りの方に、Facebook で「こういう話を聞いたよ」ですとか、あるいは同僚の方に「プロボノって知ってる？」て聞いてみるとか、そういうことでもいいので、少しずつでも「何か面白いことが始まっているのかも」というふうに関心が広がっていくとありがたいなと思います。



(終了)